

作品集『壁』における食の表象 - 安部公房はその文学に食をどう描いたか

Representation of food in the collection of works *Kabe*: How Abe Kōbō wrote about food in the literature¹

Yūki Sasaki

Abstract: This paper aims to examine the way “food” is depicted in “Kabe (The Wall)” (1951) written by Abe Kōbō. “Kabe” is Abe’s first collection of works, and it consists of three parts: “S.Karuma-shi no Hanzai (The Crime of S. Karma)” (1951), “Akai Mayu (The Red Cocoon)” (1950), and six other works. Based on discussions in previous studies, I first aimed to clarify where Abe’s “consistent intention” in his “Postscript” can be found from the perspective of quantitative text analysis using KH Coder. Then, I chose “food” as one of the indicators to support the worldbuilding and the actions of the characters in the work. I pointed out that the variety of both food and drink is limited, also there are no significant descriptions of taste, and that it can be inferred that what people eat is divided according to their positions in the story. In “Kabe”, the description of “food” is used as a trigger for the characters to move on to the next action.

Keyword: Abe Kōbō, “Kabe”, quantitative text analysis

要旨: 本稿では、安部公房『壁』（月曜書房、1951）を取り上げ、その「食」の描かれかたを考察する。『壁』は安部にとって最初の作品集である。三部構成をとり、「S・カルマ氏の犯罪」（『近代文学』[1951・3]、第25回芥川賞受賞作品）、「赤い繭」（『人間』[1950・12]、第2回戦後文学賞受賞作品）など6作を収める。安部は、この作品集の「あとがき」で、「この三篇は、三部作と断つてありますとおり、だいたい一貫した意図によって書かれたものです」と記す。本稿では先行研究での議論を踏まえつつ、まずは、安部が「あとがき」に示す「一貫した意図」がどこにみられるか、KH Coderを用い、計量テキスト分析の観点から明らかにすることを目指した。その上で、作品世界や作中人物の行動を支える一つの指標として「食事」を取り上げた。食べ物、飲み物いずれにおいても種類が限られていること、味覚に関わる目立った描写がないこと、作中人物の立場によって口にしているものが分けられていると推測できることなどを指摘した。『壁』において、「食」の描写は、作中人物たちが次の行動に移る際のきっかけとして用いられていると考えられる。

キーワード: 安部公房、『壁』、計量テキスト分析

1. はじめに

本稿では、日本現代文学における「食」の描かれかたについて、安部公房『壁』（月曜書房、1951）から考える。以下、2.では、安部公房の略歴

¹ 今回、安部公房文学の「食」について検討する機会をくださったDiego Cucinelli先生に、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。

Yūki Sasaki, Kyoto University, Japan, sasaki.yuki.8n@kyoto-u.ac.jp

FUP Best Practice in Scholarly Publishing (DOI 10.36253/fup_best_practice)

Yūki Sasaki, 作品集『壁』における食の表象 - 安部公房はその文学に食をどう描いたか / *Representation of food in the collection of works “Kabe”: How Abe Kōbō wrote about food in the literature*, pp. 25-44, © 2021 Author(s), CC BY 4.0 International, DOI 10.36253/978-88-5518-506-6.05, in Miriam Castorina, Diego Cucinelli (edited by), *Food issues 食事. Interdisciplinary Studies on Food in Modern and Contemporary East Asia*, © 2021 Author(s), content CC BY 4.0 International, metadata CC0 1.0 Universal, published by Firenze University Press (www.fupress.com), ISSN 2704-5919 (online), ISBN 978-88-5518-506-6 (PDF), DOI 10.36253/978-88-5518-506-6

および戦後の言論統制を概観し、本稿での論点を述べる。3.では、計量テキスト分析の手法を用い、『壁』の全体を整理した後、「食」に関連する用例をみていく。4.では、『壁』を通して安部が何を目指そうとしたか、それに「食」がどう関わっているか、考えを述べる。

2. 安部公房と1950年代

2.1 安部公房

安部公房（1924–1993）は、満洲医科大学で栄養学を専攻した父・浅吉と、社会主義運動やプロレタリア文学に関心を寄せていた母・ヨリミの間に、二男二女の長男として、東京で生まれた。翌年、当時の満洲国奉天市（現・中華人民共和国遼寧省瀋陽市）に渡った安部は、高校入学までの大半の時間をそこで過ごす。40年、奉天第二中学校を16歳で修了後、単身上京、旧制成城高等学校理科乙類に入学する。卒業後は、東京帝国大学（現・東京大学）医学部医科に入学、日本の敗戦が近いと聞き知った44年に再び奉天に渡る。46年に引揚げ船により満洲から日本に戻った安部は、高校時代の担任であった阿部六郎（1904–1957）を介し埴谷雄高（1909–1997）に送られた「故郷を失ひて」第1章の『個性』掲載（1948・2）をもって文壇に登場する。本稿で取り上げる『壁』もまた初期に位置づけられる。

安部には、広く知られている作品の一つに『砂の女』（新潮社、1962）があるが、第14回読売文学賞を受賞した後、様々な言語に翻訳され、1968年にはフランス共和国で最優秀外国文学賞を受賞した。それに続き、他の作品も翻訳版が発表される²など、国内外に多くの読者を持つことが想像できる。著作集および全集として、『安部公房戯曲全集』（全1巻、新潮社、1970）、『安部公房全作品』（全15巻、新潮社、1972–1973）、『安部公房全集』（全30巻、新潮社、1997–2009）などがある。また、2012年には最初期の短編「天使」が発見され、『新潮』（2012・12）に掲載された後、当該作品を含む初期短編11編からなる『<霊媒の話より>題未定安部公房初期短編集』（2013、新潮社）も編まれた。

2.2 『壁』と同時代評、1950年代の安部

次に、作品集『壁』の文献情報を確認していく。この作品集は、「序文」³と「あとがき」をのぞき、第一部、第二部、第三部に分かれる。

² 『安部公房全集』30（新潮社、2009）所収「被翻訳作品目録」によれば、2008年6月時点で翻訳されている作品は、「作品数75、言語数43、項目数340、雑誌掲載64点、安部公房の著書228点」「共著58点」である。なお、ここには同一出版社による重版は含まれない。

³ 石川淳（1899-1987）による。

それぞれの表題作は「S・カルマ氏の犯罪」⁴、「バベルの塔の狸」⁵、「赤い繭」であり、このうち、第三部の「赤い繭」は、「赤い繭」「洪水」「魔法のチョーク」「事業」からなる。それぞれの作品は、『壁』に収められたのとは別に雑誌⁶にも発表されている。表1は、それぞれの作品について、主な作中人物と語り手を整理したものである。

表1

部	作品名	主な作中人物(職業)	語り手
一	S・カルマ氏の犯罪	「S・カルマ」(N火災保険・資料課) 「Y子」(N火災保険・タイピスト) 「名刺」	一人称(ぼく)
二	バベルの塔の狸	「アンテン」(貧しい詩人) 「とらぬ狸」	一人称(ぼく)
三	赤い繭	「おれ」 「女」 「彼」	一人称(おれ)
	洪水	「ある貧しい、しかし誠実な、哲学者」 「液体労働者」 「大工場主」 「政府の高官」 「国王や元首たち」	非人称
	魔法のチョーク	「アルゴン君」(貧しい画家) 「イヴ」(ミス・ニッポン)	非人称(焦点化:アルゴン君)
	事業	「私」(すぐれた司祭、食肉加工業)	一人称(私)

これらの作品について、曾根博義[編]『文藝時評大系 昭和編II』(全13巻・別巻、ゆまに書房、2008-2009)をもとに、同時代評を整理した(表2)。

一見して、「S・カルマ氏の犯罪」(第一部)に関する言及が多いこと、次に「赤い繭」(第三部)に関する言及が多いことがわかる。この二作に対する言及回数が多いのは、この二作が文学賞⁷を受賞したことが関わっているだろう。

ここで、1950年前後の日本の状況を確認しておきたい。特に、作家であった安部公房が影響を受けたと考えられる、言論に関する状況をみてい

⁴ 初題「壁—S・カルマ氏の犯罪—」。1950年3月5日擱筆。

⁵ 1950年5月13日擱筆。

⁶ 初出は以下のとおり。「S・カルマ氏の犯罪」(『近代文学』1951・2)、「バベルの塔の狸」(『人間』1951・5)、「赤い繭」(『人間』1950・12)、「洪水」(『人間』1950・12)、「魔法のチョーク」(『人間』1950・12)、「事業」(『世紀群』1950・12、奥付なし・推定)。

⁷ なお、「赤い繭」が受賞した戦後文学賞は、月曜書房が創設した賞である。審査員は、野間宏、椎名麟三、花田清輝、佐々木基一、埴谷雄高。

こう。よく知られているとおり、第二次世界大戦後、日本では言論統制が敷かれた。それを示したのが、表3である。

表2

53	52									51	50				
03 01	06 30	12 23	12 01	10 04	10 03	09 30	09 24	05 01	03 09	03 07	03 03	01 01	12 06	11 29	
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			S・カルマ氏の犯罪	作品名
								●						バベルの塔の狸	
					●			●				●	●	赤い薔	
												●		洪水	
														魔法のチョーク	
														事業	
河上徹太郎	豊田穰	青野季吉	河上徹太郎他	浅見潤	豊島与志雄	仲野三郎	平田次三郎	荒正人	本多秋五	山本健吉	寺田透	石上玄一郎他	十返肇	平田次三郎	
東京新聞夕刊	中部日本新聞	北国新聞	文学界	東京新聞夕刊	朝日新聞	神戸新聞	図書新聞	中京新聞	東京タイムズ	日本読書新聞	東京新聞	文学界	日本読書新聞	図書新聞	所載誌名

表3

事項	月日	年	月日	「壁」所収作品
GHQ 各報道機関にプレスコード通達 (General Headquarters)	9/19	1945		
CCDによる雑誌検閲(事前検閲)開始 (民間検閲局:Civil Censorship Detachment)	9			
CCDによる雑誌検閲(事後検閲)開始 ※「極右極左」2誌は継続して事前検閲	12	1947		
GHQ 事前検閲 中止	7	1948		
ほとんどの雑誌が事後検閲の対象に	8			
CCDによる雑誌検閲 廃止	10	1949		
			10	事業
			12	赤い薔／洪水／ 魔法のチョーク
			2	S・カルマ氏の犯罪
			5	バベルの塔の狸
1952年までGHQ/SCAPIによる日本占領は継続 (連合国軍最高司令官総司令部:Supreme Commander for the Allied Powers)				

戦後の言論統制は、1945年9月、GHQ（General Headquarters）が各報道機関にプレスコードを通達したことから始まった。それをうけ、CCD（Civil Censorship Detachment）が雑誌検閲を始めた。最初は事前検閲であったが、1947年には事後検閲に切り替わった。1948年にGHQが事前検閲を中止したことにより、ほとんどの雑誌が事後検閲の対象になった。その後、49年にはCCDによる雑誌検閲は廃止された。ただし、1952年までGHQ/SCAP（Supreme Commander for the Allied Powers）による日本占領は継続した。『壁』に収められる作品はすべて、この間の時期に擱筆し⁸発表されたわけだが、安部は、検閲を警戒していた可能性⁹もある。

2.3 問題の所在

さて、『壁』の「あとがき」には、次のように書かれている。

この三篇は、三部作と断つてありますとおりに、だいたい一貫した意図によって書かれたものです。壁というのはその方法論にほかなりません。壁がいかにか人間を絶望させるかというより、壁がいかにか人間の精神のよき運動となり、人間を健康な笑いにさそうかということを示すのが目的でした。しかしこれを書いてから、壁にも階級があることを、そしてこの壁があまりにも小市民的でありすぎたことを思い、いささか悔まずにはられませんでした。

2.2で挙げたとおり、『壁』に収められた作品は、作品集に収められる以前に雑誌に掲載されており、先行研究の多くは個別作品の考察である。本稿では、それぞれの作品が作品集『壁』としてまとめられた意味、つまり、「三部作」としての『壁』が「一貫した意図によって書かれたもの」であるとする理由、しかしながら、「壁にも階級があることを、そしてこの壁があまりにも小市民的でありすぎたこと」に気づいたというのはどこに現れるかをみていきたいと考えている。本稿では、「食」への着目を通して、食にまつわる描写が『壁』の各作品にどう現れ、それがどういう効果をもたらしているか、ということを考えてい。

⁸ 「S・カルマ氏の犯罪」について、安部は「ひどく不遇な作品だった。書きあげてから半年だったか一年だったか、ほとんど全部の雑誌社を転々としたあげく、どうにか近代文学にひろってもらった。つまりそれだけ型破りで、新しかったわけである」と述べしている。「壁」の空想力『読売新聞』（1954・11・15）朝刊8面。

⁹ 安部の生前未発表作品の一つに「保護色」（1951・5）がある。『安部公房全集』3（新潮社、1997）所収。安部は自身が作品集のあとがきを書き終えた後、石川淳に序文の礼を書簡（1951・5・19）に認めている。安部は雑誌『群像』への掲載を望んだが、それは叶わなかった。この経緯については、拙稿「安部公房「保護色」の素材と方法—シュルレアリスムとマルクス主義理論の実践として—」『京都大学国際交流センター論叢』（2016・2）1-19頁で論じた。「保護色」以降に発表された作品では、ギリシア・ローマ神話やイソップ寓話に材を取ったものが増える。「保護色」が雑誌に掲載されなかったことが、作家活動に関する新たな方法を見出す機会となったと考えている。

3. 計量テキスト分析による結果・考察

3.1 『壁』のテキストの特徴をみる

分析にはKH Coder¹⁰を用いた。今回の分析にあたり、いくつかの手順を踏んだ。具体的な手順は以下のとおりである。

- ① データをテキストファイル¹¹にする。
- ② KH Coderで、「前処理」→「複合語の検出」→「茶釜を利用」で解析。
- ③ ②の結果をもとに、元のファイルに処理を行う。
 - A) 「・」「＝」「＋」「×」を読点に置換。
 - B) 「?」「!」を句点に置換。
 - C) 「...」「——」を削除。
 - D) 数式を「X」に置換。
 - E) 算用数字をすべて全角に置換。
- ④ KH Coderで、②の手順で再解析。

まずは、『壁』の作品全体をみておきたい。最初に確認するのは、文の長さである。KH Coderの「文書の単純集計」をもとに、各作品について、文の長さの平均をとった（表4）。

表4

部	作品名	文の長さの平均
一	S・カルマ氏の犯罪	16.2 (47009字/2910文)
二	バベルの塔の狸	16.5 (24925字/1507文)
三	赤い繭	15.9 (1647字/103文)
	洪水	24.6 (2459字/100文)
	魔法のチョーク	13.5 (6374字/472文)
	事業	22.5 (2996字/133文)

これら、『壁』に収められた各作品の文は相対的に長いのか、あるいは短いのか、他の日本近現代文学作家による作品と比較してみよう。前川（1995）¹²には、夏目漱石、川端康成、太宰治らの作品が並ぶ（表5）。

¹⁰ 計量テキスト分析を行うソフトウェアである。URLは<https://khcoder.net/>。製作者の樋口耕一氏（立命館大学）の名前の頭文字から命名されている。計量テキスト分析について、樋口（2020）は、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析（content analysis）を行う方法である」と定義する。

¹¹ Excelを用いた。一番上の行に「テキスト」「部」「章」を記し、テキストは一段落を一つのセルにまとめる。

¹² 前川守『1000万人のコンピュータ科学〈3〉文学編 文章を科学する』（岩波書店、1995）8頁。

『壁』と発表年が近い作品としては、太宰治の「斜陽」や「人間失格」がある。前川が分析した作品のうち、文の長さの平均がもっとも短いのは、志賀直哉「暗夜行路」の25.6である。一方、『壁』において、文の長さの平均がもっとも短い作品は「魔法のチョーク」で13.5、もっとも長い「洪水」でも24.6であり、『壁』に収められる作品は文の長さが極めて短いことがわかる。¹³

表5

作家	作品（発表年）	文の長さの平均
夏目漱石	吾輩は猫である（1905）	29.8
夏目漱石	坊っちゃん（1906）	30.9
志賀直哉	城の崎にて（1917）	28.8
志賀直哉	暗夜行路（1921）	25.6
川端康成	伊豆の踊子（1926）	30.2
川端康成	雪国（1935）	55.5
谷崎潤一郎	細雪（1943）	170.1
太宰治	斜陽（1947）	71.4
太宰治	人間失格（1948）	48.7
井上靖	楼蘭（1958）	47.8
大江健三郎	万延元年のフットボール（1967）	43.0
村上春樹	羊をめぐる冒険（1982）	36.7
吉本ばなな	キッチン（1987）	35.7
吉本ばなな	うたかた（1988）	41.2
村上龍	五分後の世界（1994）	46.2

3.1.1 『壁』において多く用いられていることば

次に示すのは、『壁』全体で頻出していると考えられる語彙である（表6）。多い順に60の語を示し、作中人物名を表す語には網掛けを施した。

表6

抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数
ぼく	748	目	97	被る	77	胸	60
言う	365	分る	95	ぼく	75	自分	60
思う	233	考える	92	出る	72	部屋	60
見る	161	人間	91	知る	72	一つ	57
Y子	142	ドクトル	89	行く	69	上る	55
声	137	手	89	日玉	69	聞く	55
おれ	120	前	83	ドア	67	立つ	55
壁	120	名刺	81	ユルバン	67	音	54
顔	106	見える	80	影	67	喉	54
獲	98	名前	78	教授	60	証人	52

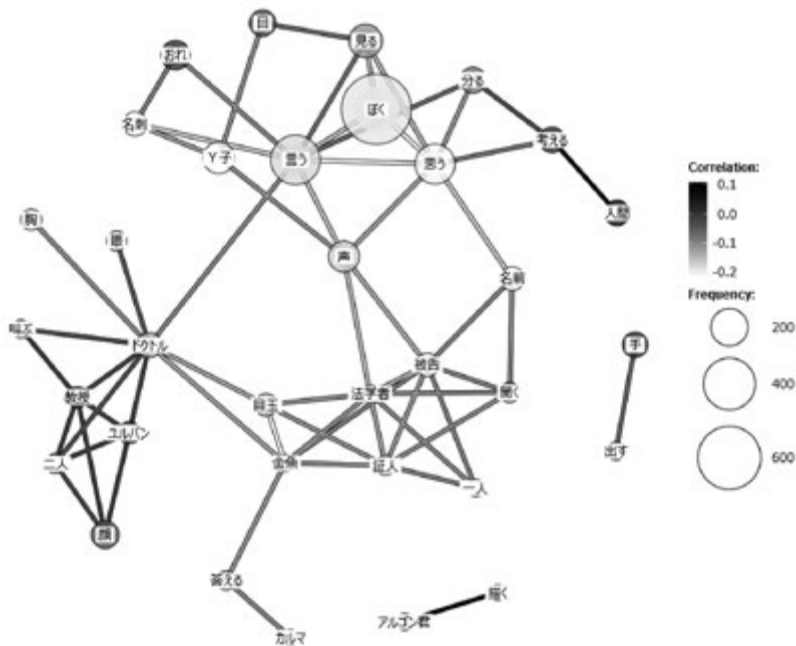
¹³ ただし、前川の調査で示される文学作品のほとんどは、中長編であり、純粋に比較できるものではないことは注意すべきである。

作中人物の名前の他に、「言う」「思う」「見る」「分る」「考える」といった動詞が多く使われていることがわかる。それぞれの動詞がどういことばとともに使われているか、3.1.2でみてみよう。

3.1.2 『壁』における頻出語の共起関係

次に、『壁』において出現パターンが互いに近い語彙はどういうものだったかをみていくため、共起ネットワークを作成した(図1)。

図1



線の色の濃さは、相関性 (Correlation) の強さを意味し、また円の大きさは、頻度 (Frequency) の高さを表す。この図から、例えば、「ぼく」といことばは「言う」「思う」「見る」「分る」と一緒によく使われていることがわかる。

3.1.3 『壁』それぞれの部において特徴的なことば

次に、『壁』それぞれの部において高い確率で現れた語彙をまとめた(表7)。先ほどと同じく、作中人物をあらわす語彙には網かけを施した。これらは、データ全体に対して、それぞれの部において特に高い確率で出現している語彙である。

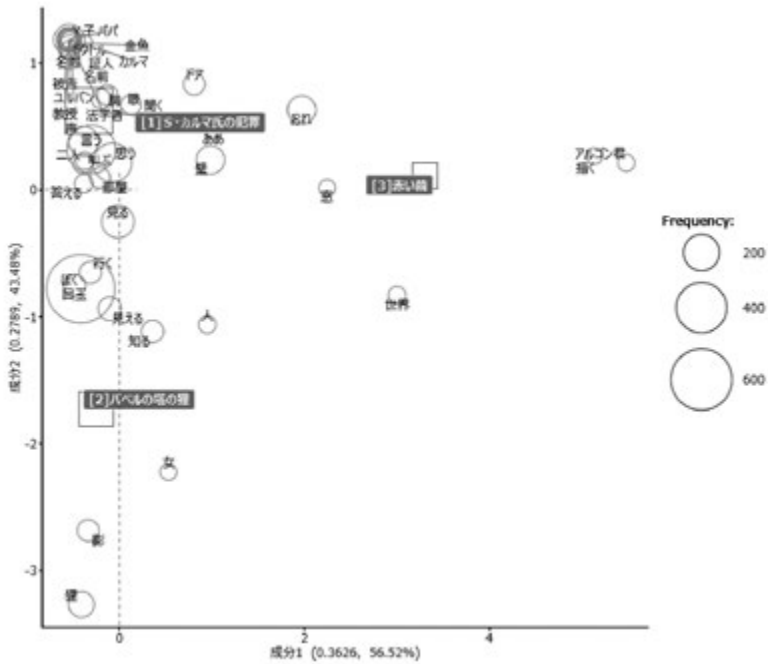
表7

S・カルマ氏の犯罪	バベルの塔の狸	赤い薔
言う .093	ぼく .164	おれ .056
思う .055	狸 .062	アルゴン君 .048
Y子 .042	影 .035	イヴ .033
声 .035	見る .030	壁 .033
見る .031	見える .021	描く .032
ドクトル .030	知る .021	世界 .030
名刺 .026	目 .021	家 .024
パパ .025	考える .020	チョコレート .022
名前 .023	人間 .020	手 .020
被告 .023	バベルの塔 .019	事業 .019

数値はJaccardの類似性測定

第一部では「言う」「思う」が、第二部では「ぼく」「狸」が、第三部では「おれ」「アルゴン君」「イヴ」がそれぞれの部を特徴づける語彙といえる。続けて、三部それぞれの部分に特徴的な語彙を調べるため、対応分析を行った(図2)。

図2



対応分析では、どの部分にも偏りなく現れる語彙は、原点(0,0)の近くに出てくる。例えば、「部屋」「思う」「答える」「叫ぶ」「二人」「壁」などがそれにあたる。偏りなく現れるというのは、つまり、それぞれの部を特徴づける語彙ではない、ということの意味する。¹⁴それに対して、原点からみて例えば、「アルゴン君」や「描く」などは原点から遠く離れており、第三部「赤い繭」に特有の特徴的な語彙だといえる。

3.2 『壁』にみられる「食べる」こと「飲む」ことの描写

ここからは、内容に注目して分析を進めていこう。まずは、作中で描かれる食べ物に関して、出現数の多い上位10種を表8に示した。

表8

抽出語	出現数	抽出語	出現数
コーヒー	18	水	5
パン	14	茶	4
肉	13	ウイスキー	2
リンゴ	10	塩豆	2
バター	9	チーズ	2

以下、KH CoderのKWIC¹⁵コンコーダンスを用い、作中での「食べる」「飲む」の描かれかたをみていく。

3.2.1 第一部「S・カルマ氏の犯罪」

第一部「S・カルマ氏の犯罪」には、「食べる」が六例、「飲む」が四例ある。すべて語り手「ぼく」が口にするものであり、「スープ」「パン」「塩豆」「水」「お茶」が挙げられる。「カメレオンの涙」とは、過マンガン酸カリウム水溶液¹⁶のことか。

¹⁴ これらから、「一貫した意図」に関して新たな着眼点を見出すことができるかもしれない。別稿を設けたい。

¹⁵ Key Words In Contextの頭文字。

¹⁶ Japan Knowledge Lib参照。「漂白、殺菌剤などに用いる」。<https://japanknowledge.com/lib/search/basic/?q1=%E3%82%AB%E3%83%A1%E3%83%AC%E3%82%AA%E3%83%B3%E6%B6%B2> (2021年4月1日閲覧)

第二部「バベルの塔の狸」には、「カメレオン水、すなわち過マンガン酸カリ液に人間の目玉をひたし、火であぶって生きながらの乾燥目玉をつくることを思いついた。カメレオン水の効用を、うがい薬だけなどと考えている人間は浅はかなものさ」とある。

前接		後接
空腹のせいかもしれないと思って、食堂に行き、(そうでなくても行ったのでしょうが、) スープ二杯とパン一斤半を	食べ	ました。数量までわざわざ書いたのは、むろんそれがぼくの普通量でないことを明示するためです。
ところがそうしている間にも、その変なことはいよいよ変になり、胸はますますからっぽになって行くので、ぼくはそれ以上	食べる	のをやめました。おなかはとっくに一杯になっているのでしたから。
数学者がまた怒鳴りました。「それで被告がどうした。」／「被告は今朝わたしの店にきてパンを	食べ	ました。」「それで。」
「それで。」「被告はパンを	食べ	てしまいました。」「盗んだのだな。」と法学者が上ずった声で言いました。「いいえ。」と少女はびっくりして言いました。
しばらくうとうとして、時計を見ると十一時半でした。名刺はまだ帰っていませんでした。／塩豆をひとつかみ	食べ	て、水を飲むと、急に睡たくなりました。着替えをすませ、今度は本格的にベッドにもぐりこみました。
塩豆をひとつかみ食べて、水を	飲む	と、急に睡たくなりました。
大きなあくびを両手の中にくずめ、顔を上げるともう外が明るくなっていました。昨夜の残りの塩豆を	食べ	、水を飲むと、急に心がふさぎ、悲しくなりました。
昨夜の残りの塩豆を食べ、水を	飲む	と、急に心がふさぎ、悲しくなりました。
異様な物音が、ぼくのすぐわきで起り、それが実になんとも形容しがたい音なので、ぎょっとして顔を上げると、白い球状の金属が上に向いた管状の口から白い蒸気をはき、激しく身をふるわせているのでした。／それは電熱器にかけたやかんで、いつのまにかぼくはまた部屋にいたのでした。／そんなに	おいしい	と思ったことがないほど、おいしいお茶でした。
水道の管に口をつけて、胃に重味を感じずるほど	飲み	ました。時計を見ると、やはり十二時を指していました。
瓶には「カメレオンの涙」と書いてありました。／一寸口をつけてみましたが、どうも	飲む	気にはなれませんでした。

この他、語り手「ぼく」が「小麦粉をフライパンにかける」¹⁷場面が描かれる。ただし、「ぼく」がそれを口にすることはない。

¹⁷ 中国料理の一つ「餅」(餅bing)の可能性もある。佐藤美智子・小原楓『満洲料理法 一品料理の部』(初版は満洲事情案内所、1942、披見本は大空社出版、2020) 189頁に「餅」の項目があり、安部も幼少期を過ごした旧満洲で食べていたか。材料／メリケン粉コップ五杯／方法／1 メリケン粉を水でぬる、麵棒で延ばし生粉をふる、その上にラードを少し引いて生粉を又その上に少しふる／2 それをくる／＼巻いて四種位の長さ庖丁で切る／3 それを押つぶし麵棒で平にのぼす、直径八—一〇糎位／4 ラードを鍋に引き、火にかけて両面を焼く

ぼくは鼻をすすりながら小麦粉をフライパンにかけて焼きました。／丁度焼け終わったとき、誰かドアをノックするものがありました。はっきり理由は分かりませんでしたが、何かしら理由を感じて、ぼくは返事をせずにドアをにらみつけました。／しかしその誰かは、返事を待たずに勝手に入ってきてしまいました。田舎にいるはずのパパでした。／〔略〕／「パパ、どうしたらいいでしょう？」パパは静かに顔をあげ、ぼくを見ました。それからゆっくりと言いました。「それは何んだ？」小麦粉が真黒に焦げて煙をはいているのでした。ぼくは慌ててスイッチを切り、「ぼくの朝食です。」パパは実は小麦粉のことなんかどうでもよかったらしく、うなずきもせずに妙なことを言いだすのでした。「おまえは、ここを、どこだと思う？」「ぼくの部屋です。」

3.2.2 第二部「バベルの塔の狸」

第二部「バベルの塔の狸」には、「食べる」「飲む」いずれも用例なし。ただし、語り手「ぼく」が「K. Anten's coffin／(K・アンテンの柩)」を「K. Anten's coffee」と「読みちがえ」た場面が描かれる。

コーヒー？ぼくのコーヒーだって？／ぼくは驚いてしまいました。いったい何んだっていうんだらう。随分沢山なコーヒーだ。ざっと見積っても五百ポンド、時価で四十万円、大変なものだ。だが、それをどうしようっていうんだらう？影を啖った代償にとでもいうつもりなのだろうか？いくらなんでも、それはあんまりだよ。たとえ、世界中のコーヒーを集めてきたって、コーヒーはコーヒーにすぎない。／〔略〕／が、次の瞬間、ぼくは箱の文字をひどく読みちがえていたのに気づきました。最後の二字は ee ではなく in なのでした。

3.2.3 第三部「赤い繭」

第一作「赤い繭」には、「食べる」「飲む」いずれも用例なし。

第二作「洪水」には、「飲む」が二例ある。「大工場主」が口にするものとして「コーヒー」「ウィスキー」、また、「ある政府の高官」が口にするものとして「水」が挙げられる。

前接		後接
ある朝、ある大工場主が、コーヒーを	飲む	うとして唇をつけた瞬間、そのたった一杯のコーヒーに溺れたり、グラス一杯のウィスキーに溺れたり、
ある政府の高官などはこう告白している。『私は水を	飲む	とき、コップの中の水を見て、それがもはや水であるとは思えない。

第三作「魔法のチョーク」には、「アルゴン君」が口にするものとして「パン」「リンゴ」「バター」「砂糖」「水」「米らしいもの」「弁当」「コーヒー」「ウィスキー」「チーズ」が挙げられる。「アルゴン君」はチョークを使い、壁に「野球のグローブのようなジャムパン」「バター入

りのロールパン」「大人の頭ほどもある食パン」「煉瓦ほどもあるバター
の塊」「コーヒー」「マッチ箱ほどの角砂糖三つ」を描き、次の日には
「パンとバターと、サージンのかん詰と、それにコーヒー」を描く。この
他に、「アルゴン君」が想像する食べ物として「肉屋で揚げている豚肉」
「下のおかみさんが焼いている魚、多分鯖」「パン菓子」「かん詰」「ミ
ルク」「牛肉」が描かれる。なお、「魔法のチョーク」においてもっとも
多く現れるのは「コーヒー」であり、七回に上る。

前接		後接
そら、パンの肌をすべってゆくこの指 の感触。思いきって、この	舌ざわり	。—アルゴン君、これでも信じられない というのか？
リンゴはリンゴの味（これは雪リンゴ だ）。パンはパンの味（アメリカの味 だ）。バターはバターの味（包紙のレ ッテルと同じ中味。マーガリンではな い）、砂糖は砂糖の味（甘い）。ああ、 全部本物の味だ。ナイフは光ってい て、顔がうつる。／気がつくと、いつ の間にか	食べ	おわっていて、アルゴン君はほっとし た。しかし何故ほっとしたのか、その 理由を思い出すと、急にまたあわてだ した。例の赤いチョークを手にとりて、 しげしげと観察する。
共同水道で、掌にうけた水をたてつづ けに一リットルも	飲む	と、まだもやにつつまれて明けきらぬ 寂しい街に出た。
食堂の炊事場から流れ出している下 水の上に身をとどめ、ねばねばしたタ ール様の汚水に手をつっこみ、何や ら引出した。籠になった金網だった。 それを近くの小川で洗うと、	食べ	られそうなものが残った。とりわけ、米 らしいものがその半分を占めているの が心強かった。そこに金網をしかけて おくと、一日で一回分の食物にありつ けることを、最近彼はアパートの老人 から聞き知ったのだった。老人は、丁 度ひと月ほど前から、その分だけおから ¹⁸ が買える身分になったので、食堂の 下水を彼にゆずってくれたのだった。

¹⁸ 「生活と芸術に体当たり 愛の『巣箱』の新進作家『サン写真新聞』（1951・4・25）
2-3面には、安部公房と妻・真知子への取材が掲載されている。ここに、「食うや食わ
ず」の生活が続き、「オカラ」を食べていたという真知子のことばが確認できる。

『東大の医学部を卒業するころ 医者にはなるまいと決心したんです』長
髪をかきあげながら 第2回戦後文学賞に輝く27歳の安倍公房君はいう 昭和
23年『終りし道の標』以来 特異な筆体で書き続けて来た努力が実を結び 近
作の寓話『赤い繭』（雑誌人間）が 今回の受賞作品となったもの 結婚生活
既に4年 美術学校出身の婦人真知子さん（24）は『2 3年は食うや食わずで
した 薪を拾い オカラにショーユの日が幾日も……』と苦しくも堪えてきた
2人の貧乏物語を続ける 『でもこの人のためには かえってよかったですと思いま
す 少くとも観念的でなくなりましたから』 公房君は素直にうなづく 幾度
か間借を追われたあげく ここ文京区茗荷谷 猪野毛さんの好意で 物置半
分を借り受けたのが去年の10月 床も壁も すべてが2人の手で作られた 冬
の夜 隙間もる粉雪が 原稿用紙をぬらしたこともあったが 新しい生活への
喜びは 3坪半の小屋を忽ち愛の『巣箱』に変えてしまった『装飾的なマチスよ
り 生命感のあふれるピカソの方が好きです』と真知子さん 『僕は古代や中
世に憧れるんですよもっと社会性のある芸術をというのが念願ですね』と公房君

昨日の御馳走を想い出すと、これはまたなんて泥臭く、まずいことだろう。だが、魔法ではなく、実際に腹の足しになるということはかけがえもなく大事なことであったから、拒むことができない。喉の動きを一口ごとに意識しなければならぬほどまずくても、	食べ	なくてはならぬのだ。くそ、これが現実というやつさ。
アルゴン君はこわばった無表情でうなずき、いつものように弁当を	分け	てもらい、自動的に深く頭を下げたまま外に出た。
さらに途中の古本屋で目にとまった料理全集を一冊。余った金でコーヒーを	飲ん	だ。そのコーヒーは、壁から描き出したコーヒーとくらべて、いささかもすぐれた点があるとは思えなかった。
まあ、たのしみは先にとっておいたほうが賢明と、ウィスキーとチーズを描いて、ちびちび	やり	ながらゆっくり考えることにした。

第四作「事業」は、事業家「私」が、「人口過剰」を「合理的」に解決する方法として「食用を目的とする殺人の合法化」を目指すとともに、「人肉ソーセージ」を作るための機械「ユートピヤ」の申請書「作制」のために、「彼の中の彼」に相談するという内容である。¹⁹ここでは、「食べる」「飲む」いずれも用例はないが、「人肉」に関する記述がみられる。

前接		後接
さて、私の新しい事業がいかなるものであるか、賢明なる貴下にはすでにお気付きのことであろう。いかにも、そのとおり、一言にして言えば、蛋白源を鼠肉から、より豊富で採取に便利な、しかも一段と	口当り	のいい人肉に切替えたわけである。
ねがわくは、近い御来訪をお待ちする。心からの歓迎が貴下をお迎えするであろう。当日のメニューには、腹にバターと香料をつめ、蜜につけた六ヶ月の胎児（食べごろである。とりわけ軟骨の	歯ざわり	は格別である。)の丸焼が、特に付け加えられ、用意されるであろうことを、お誘いの言葉として申しそえておく次第である。

たくましく そしておおらかに芸術に生きぬく若い力を 今日も晩春の陽光が包んでいる 庭の焼跡に残った1本の若木も 相寄る魂の成長を見守っているようだ..... (原文ママ)

公房と眞知子は47年4月に結婚。この新聞記事には、安部夫婦の家が茗荷谷にあることが書かれているが、48年1月までは仮住まい先を転々とする生活を送っており、48年1月から50年10月までは、画家・板倉賛治宅に間借りしていた。眞知とも名乗った安部眞知子は、安部作品の装幀、挿絵を手がけることもあった。例えば、「魔法のチョコレート」『世紀群』(1950・12、奥付なし・推定、広島大学中央図書館佐々木基一記念文庫で確認、請求番号：ササキ/5772)の扉も眞知が担当。

¹⁹ ロシア文学にソーセージがモチーフとなる『羨望』(Olesha, IU'rii Karlovich作、原題 *Зависть*、1927)がある。「事業」とのつながりはあるか。

3.3 同時代との関連性

『壁』それぞれの作品において、作中人物たちはなぜ食べるのか。それは、空腹を満たすため、栄養補給のため、すなわち生理的欲求を満たすためである。食に楽しみを見出しているものは、第三部の後半二作「魔法のチョコレート」の「アルゴン君」および、「事業」の「私」の各一例のみである。

それに対し、飲み物は、どうだろうか。『壁』において作中人物たちが飲むもの、それは大きく分けて三つ、すなわち、水、コーヒー、ウィスキーである。このうち、コーヒーとウィスキーは、嗜好品といえるものである。特に、コーヒーは、『壁』全体を通して、一八回現れる。なぜコーヒーが描かれるのか、1950年前後の新聞記事を参照しつつ、同時代の状況をみていこう。まず、1948年の『読売新聞』の記事²⁰を引用する。ここでは、「輸入コーヒー」を希望する「一般家庭」に「配給する」ということが書かれる。

農林省は近く六大都市および広島、福岡、札幌の三都市の一般家庭に輸入コーヒーを年内に希望配給する、数量は一世帯当たり四分の一ポンド（約五十円）配給方法は食料品公団を通じかん詰登録店から購入次の1950年の『朝日新聞』の記事²¹には、「戦後初めて」「コーヒーが輸入され」ることが書かれ、広く味わえるようになることへの期待がみられる。

戦後初めてインドネシア、中南米から香り高いコーヒーが輸入される、通産省で三十日発表した日本・インドネシア通商協定やさきに発表された日伯通商協定中にくまれているもので、通産省ではコーヒーその他で年間約一千トン程度輸入したいといっている、コーヒーの第一船はおそくも八月中旬には入港するという、このコーヒーが入れば一般家庭はもちろん喫茶店などで本場のジャワ、ブラジルコーヒーが現在の市価の半値ぐらいで味えるようになる

上の『朝日新聞』と同日に発行された『読売新聞』の記事²²では価格の目安が確認できる。²³

卅日正式調印された対インドネシアとの通商協定によりヤシ油、生ゴム、マンガン鉱などとともに待望のコーヒー、ココア豆が年間一千トン前後輸入されることになったが、さしあたり七月―九月間に二三

²⁰ 「配給 輸入コーヒー」『読売新聞』（1948・11・5）朝刊3面。

²¹ 「お待かね、輸入コーヒー ジャワから来月中旬には第一船」『朝日新聞』（1950・7・1）朝刊3面。

²² 「珈琲党に朗報」『読売新聞』（1950・7・1）朝刊2面。

²³ 「バベルの塔の狸」（1950・5・13摺筆）にはコーヒーが「五百ポンド、時価で四十万円」という記述がある。作品の記述を信用するなら、この二か月で価格が急激に変動したと考えられる。裏を返せば、戦後から1950年7月までの日本において、嗜好品としてのコーヒーの価値は極めて高かったといえるのではないだろうか。

百トンが入荷する見込みで、お値段もポンド七、八十セント（二百五十円—二百九十円）見当で喫茶店の一ぱい五、六十円のコーヒーも半値近くになるだろうとは通産省市場三課の見通し

併せて、ウィスキーもみておこう。次の引用は、『朝日新聞』の記事²⁴であり、ここにウィスキーに関する記述がある。

ウィスキー いわゆる雑酒類は四月からすべて統制を外された。麦芽から蒸留した本物を三年以上タルで貯蔵したものをわずか含む一級品、銘柄指定のサントリー、ニッカ、トミー、モルト、キングなどが七二〇cc一三五〇円もするのに、最近本物三割以上のレア・オールドと称する特級品が一本千八百円でお目見得した。酒場ではハイボール百円、レア・オールドが百三十円。酒の広告が新聞に現れるようになったのも、質の向上を目指す自由競争の現れだが、とにかく高い。

記事の一行目に「統制を外された」という表現がみえる。戦後しばらくは言論だけでなく食料品にも統制があった。表9には、主な食料品の統制撤廃の時期を示した。

表9

事項	月日	年	月日	【壁】所収作品
野菜・魚※価格差騰により翌年3月再統制	11	1945		
果実	10	1947		
酒類	12			
野菜	4	1949		
魚	4		3	S・カルマ氏の犯罪（関筆）
パンなど米以外の主食品	5		5	バベルの塔の狸（関筆）
調味料（みそ・しょうゆなど）	7	1950		
コーヒーの輸入再開			10	事業
			12	赤い繭／洪水／魔法のチョコレート
雑穀（米・麦以外の穀物）	3	1951	2	S・カルマ氏の犯罪
			5	バベルの塔の狸
砂糖	4	1952		

4. おわりに 今後の展望

3.3 で、『壁』の作中人物たちは、生理的欲求を満たすために食事をしているのではないかと述べた。『壁』では、いわゆる基本五味²⁵とよばれ

²⁴ 「戦後酒の生態」『朝日新聞』（1950・6・15）朝刊4面。

²⁵ 「甘味」「酸味」「塩味」「苦味」「うま味」の五つ。野林厚志〔編〕『世界の食文化百科事典』（丸善出版、2021）S24頁。

るものが描かれることはほぼなく、また、食事を楽しむ場面が描かれることもない。一方で、食べ物の描写には、因果関係を示す表現²⁶が共起している用例がみられ、食べ物を描くことは、食べ物そのものというより、次の動作を導く役割を付与するためであるとも考えられる。

それと同時に、同時代評の中に「乾いた文体」²⁷をしているというものも確認できるが、即物的ともいえる表現になっているのは、当時安部が強い関心を寄せていた実存主義の影響があるとも考えられるが、それでも『壁』において「食事」は描かれるのはなぜか。その理由を考えたとき、食べ物や飲み物によって作中人物の属性、性格を規定しようとしたのではないとも考えられる。例えば、飲み物の中で最も多く登場する「コーヒー」についても、それを飲むのは、「大工場主」（「洪水」）であり、この人物は雇用者である。一方で、雇用者以外が「コーヒー」を口にする場面は描かれない。²⁸つまり、安部は飲み物によって階級の違いを表現しようとしたのではないか。しかしながら、それを明確にするためには、飲み物の種類を限定する必要がある、それが「小市民」（『壁』「あとがき」）、つまり、「資本家と労働者の中間に属する人」²⁹のような人物像に集約されることにつながってしまったのではないか。安部自身、『壁』の文体、特に第一部「S・カルマ氏の犯罪」の文体には意識的であった³⁰

²⁶ 例えば、「昨夜の残りの塩豆を食べ、水を飲むと、急に心がふさぎ、悲しくなりました。」（「S・カルマ氏の犯罪」）、「共同水道で、掌にうけた水をたてつづけに—リットルも飲むと、まだもやにつつまれて明けきらぬ寂しい街に出た。」（「魔法のチョコレート」）などがそれに該当するといえよう。

²⁷ 河上徹太郎・河森好蔵・中村光夫・山本健吉「座談会 今年の小説の収穫は何か」『文学界』（1951・12）内、山本健吉の言。

²⁸ 雇用者でない作中人物のうち、「コーヒー」を飲んでいたのは、「貧しい画家」である「アルゴン君」（「魔法のチョコレート」）である。ただし、彼が飲んでいた「コーヒー」は、壁に描き出した「コーヒー」であり、壁に描き出した金で得た「コーヒー」であった。

²⁹ Japan Knowledge Lib参照。https://japanknowledge.com/lib/search/basic/index.html?q1=%E5%B0%8F%E5%B8%82%E6%B0%91（2021年4月1日閲覧）

³⁰ 安部公房「私の文章」『言語生活』49（1955・10）56-58頁。後、「S・カルマ氏の素姓」と改題され、『猛獣の心に計算器の手を』（平凡社、1957）に所収。

あのころ私はしきりとナンセンスな文章を書くように努力していた。私の文章—S・カルマ氏の犯罪の—を分析して下さった市川〔孝〕氏が、説明的であり、蔓衍体であると指摘した部分などは、むしろその意識的な工夫である。これが意識的であることは、私の他の作品と比較してm1ただけに分かることと思う。／〔略〕／「で」「から」等の接続助詞の多出も、同様に理屈よりはぎごちないものだ。関節の単純さのために、すべての行動をたやすく予見でき、予見できすぎることによってかえって謎めいてくる、あのマリオネットのとぼけたおかしさに近いものだ。あるいは即物性から飛躍できない、子供の「理由さがし」のこっけいさに似たものだ。

空腹のせいかもしれないと思って、食堂に行き……（イ）

（そうでなくても行ったのでしょうか）……（ロ）

の関係について、いま少し立入ってみれば、この主人公の発想が、単に（イ）と（ロ）が反復であるだけでなく、（イ）自身の中に、（ロ）が出てくる必然性をすでに内包していたのだということが分かる。彼はまず自分の空虚感に不安を感じ、その理由をさがそうと努力する。そこで空腹のせいかもしれないと思って、食堂に行くのだが、本当に

ようであるが、文体を実験しようという考えがかえって、限界を『壁』に与えてしまったのではないか。

安部が、「多様な文体や方法上の実験を試み」たというのは、本多秋五³¹のことばであった。後年、安部は『壁』に「強い愛着を感じて」おり、「思いだすたびに、自分の空想力の豊富さに、われながら感嘆する」³²と語っている。しかしながら、これまでの研究では、多様な文体というのはあくまで印象にとどまっており、それがどのように変わったのかは明らかにされていない。安部が作中で使った語彙や表現を計量的にみていくことで、具体的にどのように文体が変遷していったかを知ることができる。今後、どのような表現に安部らしさがみられるのか、それも含め、安部文学を探っていきたい。

【付記】

安部作品及び発言の引用は、特記したものを除いて『安部公房全集』（全30巻、新潮社、1997・7～2009・3）に拠った。その他の引用は、特記したものを除いて初出に拠り、漢字は通行の字体を用いた。ただし、固有名詞など必要と思われる個所には、旧字体や異体字・俗字の類を残した場合がある。
〔 〕内の注記および引用文中の傍線は佐々木により、改行は「／」で示した。

【主な参考文献】

データベース

朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」
読売新聞記事データベース「ヨミダス歴史館」

辞書類

『日本語文章・文体・表現事典』（朝倉書店、2016）
『文藝時評大系』昭和篇Ⅱ・別巻・索引（ゆまに書房、2009）
日本コーヒー文化学会〔編〕『コーヒーの事典』（柴田書店、2001）
野林厚志〔編〕『世界の食文化百科事典』（丸善出版、2021）
森永卓郎〔監修〕『明治・大正・昭和・平成 物価の文化史事典』（展望社、2008）

不安を感じている人間なら、こんな考え方はしないはずだ。論理を追うことになれている人なら、その場合、もっと本当に理屈っぽく考えるだろう。なれていない人なら、もっと衝動的に行動するだろう。

³¹ 本多秋五『物語戦後文学史』完結編（新潮社、1965）。

³² 前掲「『壁』の空想力」『読売新聞』（1954・11・15）朝刊8面。

安部公房関係

- 李貞熙「「影」をくわえて逃げ去る「狸」—安部公房の『バベルの塔の狸』論—」『文学研究論集』（1996・3）127-42頁
- 石橋紀俊「安部公房『壁—S・カルマ氏の犯罪』論—自我・変身・言葉—」『昭和文学研究』（1998・2）102-12頁
- 石原千秋「安部公房『壁—S・カルマ氏の犯罪—』—「パパ」の崩壊—」『国文学』（1988・3）80-3頁
- 呉美姫『安部公房の<戦後>：植民地経験と初期テクストをめぐって』（クレイン、2009）
- 荻正「安部公房「S・カルマ氏の犯罪」におけるキャロル、カフカー裁判について—」『国語国文学研究』（1997・12）88-96頁
- 斎藤朋蒼「<変貌>の臨界点—安部公房『壁』序論—」『國學院大學大学院紀要 文学研究科』（2018・2）187-205頁
- 佐藤早希子「安部公房『壁』論」『藤女子大学国文学雑誌』（2017・11）22-34頁
- 鈴木登美・十重田裕一・堀ひかり・宗像和重『検閲・メディア・文学：江戸から戦後まで』（新曜社、2012）
- 田中裕之「安部公房『赤い繭』論」『近代文学試論』（1989・12）15-27頁
- 田中裕之「『S・カルマ氏の犯罪』論—作家誕生の物語—」『近代文学試論』（1990・12）30-43頁
- 田中裕之「安部公房とシャミッソー」『梅花女子大学文学部紀要』比較文化編（1999・12）1-16頁
- 谷真介〔編〕『安部公房評伝年譜』（新泉社、2002年）
- 鳥羽耕史「月曜書房版『壁』について—共同制作としての書物—」『言語文化研究 徳島大学総合科学部』（2003・2）95-107頁
- 鳥羽耕史「S・カルマ氏の剽窃—「壁」のインターテクスチュアリティ—」『国文学研究』（2003・10）57-67頁
- 鳥羽耕史〔編〕『安部公房 メディアの越境者』（森話社、2013）
- 藤井貴志「<オブジェ>達の革命—花田清輝と安部公房「壁—S・カルマ氏の犯罪」—」『愛知県立大学説林』（2016・3）19-45頁
- 胸組芙佐子「安部公房「洪水」論—人間液化とその寓意—」『稿本近代文学』（2016・3）146-56頁
- 森村優太「安部公房「赤い繭」論：「内容たる社会」とは何か」『京都語文』（2015・11）273-89頁

その他

- 石垣悟〔編〕『日本の食文化5 酒と調味料、保存食』（吉川弘文館、2019）
- 小川直之〔編〕『日本の食文化3 麦・雑穀と芋』（吉川弘文館、2019）
- 小椋秀樹〔編〕『日本語の語彙・表記』（朝倉書店、2020）
- 大本泉『名作の食卓：文学に見る食文化』（角川書店、2005）
- 小泉和子〔編〕『パンと昭和』（河出書房新社、2017）
- 昭和館学芸部「昭和館特別企画展「昭和の食の移り変わり—食卓を中心として」の概要」『昭和のくらし研究』（2004・3）49-66頁
- 真銅正宏『匂いと香りの文学誌』（春陽堂書店、2019）

- 難波英嗣「テキスト間の類似度の測定」『情報の科学と技術』（2020）
373-375頁。
- 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析』（第2版、ナカニシヤ出版、2020）
- 細田典明〔編著〕『食と文化—時空をこえた食卓から』（北海道大学出版会、2015）
- 前川守『1000万人のコンピュータ科学<3>文学編 文章を科学する』（岩波書店、1995）